

令和7年10月20日

加工用ほうれんそうにおける作業受託の実践と課題



(株)ジェイエイフーズみやざき  
原料担当 伊豆元 文博

# 本日の内容

1. 会社及び作業受託の概要
2. 現場で苦勞していること
3. 取組を継続するための課題





## 工場での加工品目について

### 《令和7年度投入計画》

・ほうれん草	2,424t
・小松菜	90t
・ごぼう	414t
・さといも	473t
・ねぎ	196t
・その他	44t
・合計	3,641t

葉物が  
全体の  
約7割

・年間稼働日255日（平均14t/日処理）。

※主力のほうれんそうは20～24t/日処理。

・12～4月に『ほうれん草・小松菜』を製造し、  
5～11月に『ごぼう・さといも・ねぎ他』を製造。

・宮崎県産・国産にこだわった商品作り。



## ほうれんそうの契約栽培について(R6年度)

- ・生産者47名(前年度52名) 面積113ha。  
※自社面積23.3ha(一部2回作付)を含む
- ・契約生産者数は過去5年間で16名減少。  
※作業受託を通じて、減少スピードの抑制や新規推進をしながら、自社面積の拡大も含めて、必要面積を確保している。
- ・栽培開始前・収穫前・反省会等、地区別で生産者を含む関係者が集まり、意見交換をおこなっている。  
※作業受託に関する意見や要望も出される。



地区別の反省会



圃場を見ながら打合せ

# ほうれんそう契約栽培における作業受託概要



ジェイエフエスが受託  
※4割再委託  
(全員利用)

生産者が対応  
(土作り+機械で  
できない作業)



機械作業は  
法人へ委託可能  
(約7割利用)  
※生産者は機械を  
買う必要がない



# ほうれんそう収穫作業



加工用

青果用



- ・地面から7~10cmの高さで刈ることで、異物や雑草、傷んだ下葉などの混入を減らす。50cm前後まで栽培。
- ・収穫機2台体制、約1ha(24t)/日、10aを約40分で収穫。



## 省人化のための取組



押さえ部分  
の機械化

- ・1か所の収穫に、収穫機2名、積込のローダー1名、計3名必要だったが、2名に削減。
- ・人件費は年間240万円削減。

機械化による省人化に取り組むことで、自社だけで2カ所同時収穫も可能に。

またコストを削減することで、受託費用の値上げを抑えることにもつながっている。

## 現場で苦勞していること

- ・複数の生産者から作業を請け負うため、後作などの個別の要望も聞きながら、スケジュールを調整。

特に近年は播種時期の10月以降も天候が安定せず、臨機応変な調整(計画の修正)が必要になっている。

- ・自社の立ち位置が「サービスを提供する立場」であり「サービスを通して栽培された原料を購入・製造する立場」でもある。⇒「サービス価格の上昇が原料仕入価格の上昇に直結する」、「サービスの質の低下が、原料の収量・品質や次年度の作付意欲に影響する」など、サービスと原料確保が密接に関係している。

生産者と調整をおこなう  
フィールドコーディネーター



逆に言えば・・・

「コスト削減によりサービス価格を抑えれば原料価格の値上げを抑制できる」、  
「サービスの質の向上が、収量・品質向上や次年度の作付意欲につながる」

## 現場で苦勞していること

- ・作業者の負担の1つである機械の移動を考えると、本来は近場中心の受託が望ましいが、原料の安定確保のため、遠方での作業も発生する。  
※年間の稼働率も考慮し、機械の複数所有はせず、都度移動している。

⇒ 最近は、「作業の相談があった際、生産者にローダーを貸してもらおう」、「オペレーターとして参加してもらおう」、など生産者と協力しておこなう作業提案もおこなっている。

※自社には「機械移動の負担軽減、作業人員の削減」、生産者には「希望圃場で栽培ができる」など、お互いにメリットがある。※「受託を受けられるか、受けられないか」ではなく、「どうしたら受けられるか」をお互いに協議。



自社の実習生が現地の実習生と交流し、新たなスキルを学ぶなど思わぬメリットも。

## 取組を継続するための課題

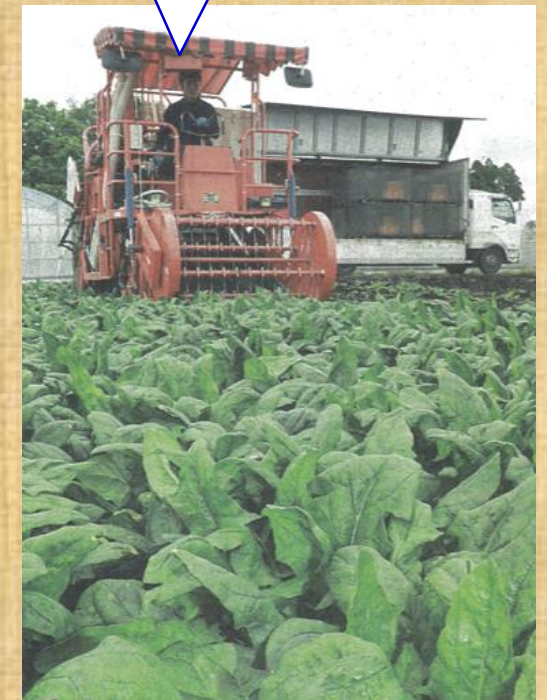
### ・機械の老朽化への対応

⇒取組が始まり10年以上が過ぎ、作業中の機械の故障なども増えてきている。※受託価格を抑えるため、都度修繕をしながら使っている。機械が高額なため、簡単に購入できない現状あり。

### ・オペレーターの確保および育成

⇒12～4月の約5カ月、安定して作業を請け負うためには、オペレーターの複数育成が必要。※農場のメインオペレーター  
の他、管理職、フィールドコーディネーター、外国人実習生など、  
社員のマルチスキル化により、複数個所での作業などにも対応  
できるよう進めている。

オペレーターの都合  
がつかない場合は、  
フィールドコーディネーター  
自ら収穫することも。



## 取組を継続するための課題

### ・防除作業におけるドローンの活用

⇒現在、約110haの契約栽培面積に対して、ブームスプレーヤー2回、動噴1回の防除をおこなっている(トータル作業想定時間:約900時間)。

※今後、登録農薬が増えドローンによる防除が可能になれば、「作業時間の低減(現状想定時間の1/3)」、「雨後すぐ防除に入ることによる病害軽減」、「作業者の負担軽減」など、メリットが大きいと考えられる。



散布用ドローンを2台所有しており、現在は甘藷や大根の防除受託に使用。

# 愚直に現場主義

明田正治書



今後も作業受託の取組を通じて、生産者の負担軽減と栽培面積の維持を図っていきたいと考えています。

ご清聴いただきありがとうございました。